

博士論文の和文要旨

論文題目

派生接辞を用いたロシア語の効率的な語彙学習法の検討
ーコーパスが提示する頻度データの言語学的な分析に基づいてー

氏 名

佐山 豪太

本稿は、派生接辞を用いたロシア語の効率的な語彙学習法を言語学的に検討した基礎研究である。具体的に言うと、本稿は語形成におけるロシア語の豊かな形態的手法に着目し、派生接辞の学習によって効率的に語彙力を伸ばすことができると考えた。その学習効果を言語学的・数量的に確認し、かつ、語彙学習の観点からロシア語の派生接辞の記述を整備するため、本稿は以下の4つの研究設問に取り組んだ。

(1) 本稿の研究設問

- a. 派生接辞学習による語彙力増加の数量的確認 (5章)
- b. 学習価値の高い派生接辞の選定 (6章)
- c. 学習価値の高い意味の選定 – 動詞接頭辞 *npo-/pro-*を例に – (7章)
- d. イメージ・スキーマと放射状カテゴリーの記述整備 – 動詞接頭辞 *npo-/pro-*を例に – (7章)

本稿は全8章で構成されるが、1～4章において後述の分析などに必要な情報を解説・導入した。そして、5～7章にかけて上記a～dを分析・考察し、8章で本稿の総括を行なった。

まず1章では本稿の背景と目的に言及した：ロシア語教育には、語彙学習に時間を割くことが難しいという環境的な問題が存在する。また、これまでロシア語に特化した語彙学習法はあまり研究されてこなかった。したがって、このような状況下で求められるのは、**ロシア語の言語的特徴を考慮した、効率的な語彙学習法の検討**であり、本稿は派生接辞の学習がそれを実現し得ると考えた。

派生接辞学習の効果を確認するために、本稿はコーパスのデータを分析に使用するが、2章では語の計量に用いられる単位（トークン、タイプ、レマ、word family（以下、WF））とその使用例に言及した。続く3章では、主にこれまでに作成されたロシア語コーパスとその頻度辞書を概観し、4章ではどのコーパスが本稿の研究設問

の分析に適しているかを考察・議論した。結果、本稿は、総語数 9,200 万語の Russian National Corpus の Main Corpus（書き言葉均衡コーパス、以下、RNC-M）を分析に採用した。また、参考として Russian National Corpus の Spoken Corpus（以下、RNC-S）も書き言葉の比較対象として分析に用いた。

5 章から研究設問の具体的な分析・考察に入った：英語と比べて、ロシア語は新しい概念・語彙素を形成する際の統合的な性質（接頭辞や接尾辞の付加など）が強い言語である。結果、ロシア語は派生語の含有率が高くなるため、派生接辞の学習により効率的に語彙力が伸ばせると推測される（5.1., 5.2.）。それを数量的に確認するために、RNC-M と RNC-S の高頻度語 5,000 語を対象としてレマ単位の頻度データを WF 単位で数え直し（WF 化）、特定語数によるテキストカバー率の上昇度合いを計算した（5.3.）。WF 化の結果、1,000 語、2,000 語といった特定語数によるテキストカバー率は大幅に上昇することがわかった。

表 1. RNC-M と RNC-S におけるレマ単位と WF 単位の高頻度語によるテキストカバー率

語数	RNC-M (書き言葉コーパス)			RNC-S (話し言葉コーパス)		
	レマ	WF		レマ	WF	
500 語	53.0%	63.3%	(=レマ単位の 1,212 語)	69.4%	76.2%	(=レマ単位の 1,132 語)
1,000 語	60.9%	72.1%	(=レマ単位の 2,533 語)	75.3%	81.4%	(=レマ単位の 2,364 語)
1,500 語	65.9%	76.1%	(=レマ単位の 3,627 語)	78.3%	83.5%	(=レマ単位の 3,400 語)
2,000 語	69.4%	78.2%	(=レマ単位の 4,397 語)	80.3%	84.6%	(=レマ単位の 4,206 語)
2,500 語	72.0%	79.3%	(=レマ単位の 4,927 語)	81.7%	85.3%	(=レマ単位の 4,801 語)

上記の分析結果は、高頻度語の中に派生語が数多く含まれており、派生接辞の知識が語彙力増加に効果的であることを示している。これまで、ロシア語の語彙力増加には派生接辞の学習が有効であろうと経験的に言われてきたが、5 章の分析によりそれが言語学的・数量的に確認された。

ただ、ロシア語は無数の派生接辞を有しており、実際の語形成において、これらは高頻度に使われるものと低頻度に使われるものが連続体を成して存在している。そこで、6 章では、派生接辞の学習優先度を検討する際の根拠となる客観的指標の獲得を目指した：実際に学習者の出会う機会が多い派生接辞を選定するため、RNC-M と RNC-S の高頻度 5,000 語内に含まれるすべての派生接辞を抽出し、それらの生起頻度（当該の派生接辞が含まれる派生語の生起頻度の合算）と実質的生産性（当該の派生接辞が含まれる派生語の個数）を計測した（6.2.）。結果、接頭辞は動詞に付加される *no-/po-*, *c-/s-*, *в-/v-*, *вы-/vy-*, *нрu-/pri-*, *нрo-/pro-*, *y-/u-*, 接尾辞は副詞を形成する *-o/-o*, 動詞を形成する *-a/-a-*, *-ва/-va-*, *-ива/-iva-*, 名詞を形成するゼロ接尾辞, *-ениj/-enij-*, *-ниj/-nij-*, *-uj/-ij-*, *-ocm'/-ost'*, 形容詞を形成する *-н/-n-*, *-ск/-sk-*, *-ов/-ov-*などの生起頻度と実質的生産性が高いことがわかった（6.3.）。なお、この分析結果は、概ね RNC-M と RNC-S に共通して観察された。効率的に語彙力を伸ばすためには、まず、上記派生接辞を優先的に学ぶことが望まれる。6 章の分析から得られたリストは、具体的にどの派生接辞を学習者に提示すべきかを検討する際の根拠として機能する。

6章の分析により、学習優先度の高い派生接辞は選定できた。ただ、ロシア語の派生接辞、特に動詞接頭辞は多義的である（かつ、動詞接頭辞の生起頻度と実質的生産性は極めて高いため（6.3.1.），その意味学習は極めて重要である）。したがって、真に効率的なロシア語の語彙学習法を検討するのであれば、**頻繁に使われる派生接辞だけでなく、その意味まで選定することが望まれる**（出会う機会の多い意味は学習価値が高い）。そこで、7章では前章の分析で生起頻度と実質的生産性の値が高かった *npo-/pro-*を分析対象として**学習価値の高い意味の選定を行った**：まず、*npo-/pro-*の意味分類を詳細に記述し、結果として本稿は9つの意味を設定した（7.1., 7.2.）。

表2. 本章における動詞接頭辞 *npo-/pro-*の意味分類

	用語	意味	基本形と接頭辞付き派生動詞の例	
1.	THROUGH	何かを通過・貫通する動作	ломать「壊す」	проломать「穴を開ける」
2.	PASS	何かの脇・側を通過する動作	ехать「進む」	просехать「通過する」
3.	MISS	何かを逃す・逸する動作	спать「寝る」	проспать「寝過ごす」
4.	DISTANCE	ある距離を通過する動作	бежать「走る」	пробежать「ある距離を走って通り過ぎる」
5.	DURATION	ある時間を通して何かに従事する動作	сидеть「座っている」	просидеть「ある時間座っている」
6.	EXTENSION	何かが伸びる動作	тянуть「張る」	протянуть「差し出す」
7.	THOROUGH	何かを徹底的に通して行う動作	варить「煮る」	проварить「十分煮る」
8.	EXPEND	何かを消費する・使い尽くす動作	пить「飲む」	пропить「飲酒に費やす」
9.	HARM	何かに害・損傷を与える動作	студить「冷やす」	простудить「風邪を引かせる」

次に、自作の100万語コーパス内で確認された *npo-/pro-*付きの派生動詞を対象として、それぞれの意味の生起頻度を計測した（7.3.）：具体的には、*npo-/pro-*が上記のどの意味で基本形に付加され、コーパス内で生起しているのかを前後の文脈に基づいて確認した。結果は以下の通りである。

表3. 自作100万語コーパスにおける *npo-/pro-*の意味毎の生起頻度

意味	生起頻度	意味	生起頻度
1. THROUGH	688	6. EXTENSION	219
2. PASS	68	7. THOROUGH	1,066
3. MISS	60	8. EXPEND	5
4. DISTANCE	459	9. HARM	32
5. DURATION	228	10. 判別不能	41

学習者が出会う頻度の多い意味は学習優先度が高いと言える。そのため、上記の分析結果は、THROUGH, DISTANCE, THOROUGH がまず学習者に提示すべき *npo-/pro-*の意味であることを示している。時間的に可能であれば、次の導入項目は DURATION と EXTENSION, そして PASS, MISS がそれに続く。なお、EXPEND と HARM は実際のテキストにおいてほぼ出会う機会がないため、導入対象外としても良いであろう。6章の分析か

らは学習価値の高い派生接辞が何であるかが判断できるが、7章のこの分析結果は、さらに、**学習優先度の高い意味がどれであるかまで示してくれる**。このようなリストが提示する情報は、派生接辞を用いた語彙学習を検討する上で重要である。

同時に、7章では *npo-/pro-*のイメージ・スキーマと放射状カテゴリーを検討・作成した(7.4.)：*npo-/pro-*の意味群を一つひとつ個別に暗記するやり方では学習者の負担は重いと推測される。そこで、7章では多義的な接頭辞の学習においてその理解を促進すると考えられるイメージ・スキーマと放射状カテゴリーの記述を整備した。この記述は、今後、多義的な接頭辞の意味学習を検討する際の土台として役立つであろう。これまで動詞接頭辞 *npo-/pro-*は言語学的な観点からも、教育的な観点からも、あまり研究されてこなかった。本稿は初めてこの接頭辞の体系的な意味記述を行い、同時に、そのイメージ・スキーマと放射状カテゴリーを作成した。直接この成果を教育現場に応用することはできないが、7章の記述整備はそれを検討する基盤を築いたという点で意義があると思う。

本稿全体を通して派生接辞を用いたロシア語の効率的な語彙学習法を検討したが、8章では上記内容を総括し、今後の課題に言及した。